

# 自己呈示としての歩行動作

## －「他者に見せたい自己」と「他者から見えている自己」－

### Walking Motion as Self-Presentation

#### －The ideal versus actual selves seen by others－

岡島瑞樹<sup>1</sup> 栗塚優希<sup>1</sup> 谷本花<sup>1</sup> 坂本晶子<sup>2</sup> 正田悠<sup>3</sup> 阪田真己子<sup>1</sup>

Mizuki Okajima, Yuki Kurizuka, Hana Tanimoto,  
Akiko Sakamoto, Haruka Shoda, and Mamiko Sakata

<sup>1</sup>同志社大学文化情報学部 <sup>2</sup>(株)ワコール人間科学研究開発センター

<sup>3</sup>立命館大学スポーツ健康科学部

Doshisha University, Wacoal Human Science Research & Development Center,  
and Ritsumeikan University

**Abstract:** 他者の存在を意識し、他者が自己に対して抱くイメージを操作することを自己呈示 (self-presentation) という。本研究では自己呈示の手段としての日常的行動として「歩行」に着目し、自己呈示の欲求、および自己呈示の方路の関連を明らかにすると共に、自身の歩行を視認することによって、今後の方路にいかなる影響を与えるかを実験的に明らかにした。

## 1. はじめに

人が「見せたい自己」を呈示するために、表情や振る舞い方などの手段によって、他者が自己に対して抱くイメージを操作することを自己呈示という (小島・太田・菅原, 2003)。本研究は自己呈示の手段としての歩行動作に着目する。

### 1.1. 自己呈示欲求と自己呈示方路

自己呈示研究において、松本 (2002) では、自己の欲求と相手の求める役割期待が異なる場合に、相手が求める役割期待に合わせた自己呈示行動をすることが示されている。また、齊藤 (2006) では、多くの日本人が自己呈示方路として自己卑下的に振る舞い、その背景には、人間関係に角が立たないように控えめに振る舞う文化規範があるとしている。このように、人は必ずしも自己呈示の欲求、すなわち「見せたい自己」をそのまま行動方路として表出しているとは限らない。したがって、表出された振る舞いが必ずしも本人の欲求を直接的に反映させたものではないことを考慮し、自己呈示欲求 (他者にどう見られたいか) と自己呈示方路 (どう振る舞うか) を区別する必要がある。

### 1.2. 「他者に見せたい自己」と「他者から見えている自己」による自己呈示の調整

鏡に映る自己の姿を見て、「他者から見えている自

己」を客観的に視認した上で、自らの外見を整えるように、「他者に見せたい自己」と「他者から見えている自己」とは極めて強い相補関係にあると考えられる。しかし、現在までの自己呈示研究においては、両者の関係性を踏まえた自己呈示の調整プロセスについては着目されてこなかった。自己呈示が、「見せたい自己」という認知的なストラテジーの行動的反映への調整プロセスだと考えるならば、「他者から見えている自己」の認知が、その後の自己呈示の調整に影響することは想像に難くない。したがって、「他者から見えている自己」を客観的に捉えることで、呈示者が今後の方路をどのように調整するかという点を確認する必要がある。

### 1.3. 自己評価の客観性と自己呈示

前述の通り、自己呈示を考える上で、「他者に見せたい自己」と「他者から見えている自己」の両者を視野に入れることは重要である。しかし、「他者から見えている自己」の姿を捉えるとき、その姿が他ならぬ「自己」であるという事実は、往々にして客観的な評価を困難にする。例えば、写真に映った自分自身の姿を見て、(他人が思う以上に) 落胆するような経験がそれに相当する。近年は、Zoom 等のオンラインコミュニケーションにおいて、コロナ禍以前はほとんど目にする事のなかった発話中の自身の表情を目の当たりにすることで、過度に自身の外見をネガティブに捉える Zoom 異形症といった身体醜形

障害が知られるようになった。

このように、自己評価を行う際には、「自己」という要因が強く関連するため、対象（自己）を客観的に捉えることが困難になる。したがって、自己評価の客観性を担保するためには、対象となる自己から「自己である」という認識を排除することによって、それが「自己である」ことをわかっている状態とどのように異なるかを検証する必要がある。

## 2. 研究目的

前章を踏まえ、本研究では、以下の3点を明らかにすることを目的とする。

1. 自己呈示欲求と自己呈示方略の一致・不一致に着目し、一致者と不一致者にはどのような差異があるのか
2. 「他者から見えている自己」を客観的に捉えることで、呈示者が「他者に見せたい自己」としての自己呈示方略をどのように調整するか
3. 対象となる自己から「自己である」という認識を排除することによって、それが「自己である」ことをわかっている状態とどのように異なるか

なお、本研究では、自己呈示方略を反映させる動作として「歩行」を対象とした。歩行は、そもそも「移動手段」としての最も日常的な基礎動作でありながらも、(若々しく見られるように歩いたり、元気に見られるように歩いたりするなど) 自己呈示手段としての機能も有しているためである。

## 3. 方法

本研究では、研究目的に即して3つの調査・実験を行った。

### 3.1. 自己呈示調査

自己呈示欲求と自己呈示方略の一致者と不一致者にはどのような差異があるのかを確かめるためにオンライン調査を行った。

#### 3.1.1. 調査参加者

調査参加者は、大学生136名(男性67名、女性65名、その他4名、 $M=20.10$ ,  $SD=1.29$ )を対象とした。

#### 3.1.2. 調査手続き

本調査では、全10項目からなる自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)を用い、それぞれの項目「あなたにどのくらいあてはまるか(自己評価)」、「他者からそう見られたいか(自己呈示欲求)」、「他者からそう見られるよう意識して振舞っているか(自己呈示

方略)」の3つの観点について項目ごとに回答してもらった。さらに、10項目の中で、最も他者からそう見られたいと思う項目を1つ選択してもらい、その選択した評価に見られるよう意識して振舞うかどうかを「振舞う」、「振舞わない」のいずれかで回答を求めた。

ここで「振舞う」を選択した人を「欲求一致自己呈示方略」者、「振舞わない」を選択した人を「欲求不一致自己呈示方略」者とする。

### 3.2. 歩行収録実験

「他者から見えている自己」を客観的に捉えるために、歩行の収録を行った。

#### 3.2.1. 実験参加者

大学生78名(男性37名、女性41名、 $M=20.92$ ,  $SD=1.22$ )・中高年層20名(女性、 $M=53.55$ ,  $SD=4.86$ )の計98名を対象とした。

#### 3.2.2. 実験手続き

実験参加者の個人特性を収集するため、自尊感情尺度(Rosenberg, 1965)、自己呈示動機付け尺度(Leary, Nezlek, Downs, Radford-Davenport, Martin, & McMullen, 1994)、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度(小島・太田・菅原, 2003)を用い、それぞれ回答を求めた。自己呈示動機付け尺度は「他者からどのくらいそう見られたいか」、「他者の前でどれほどそう見られるよう意識して振る舞っているか」の2つの観点についてそれぞれ回答を求めた。

次に、予め用意した歩行路(約13メートル)を使用し、2往復歩行してもらった。歩行に先だって、「人に見られている場面で歩く自己の姿を想像し、あなたが思い描く理想の自己を意識して歩行を行ってください」と教示した。他者の存在を意識させるため、歩行の様子を別室にいる実験関係者に配信する旨の教示も行った。ただし、この教示は自己呈示の意図を意識してもらうためのカバーストーリーであり、実際には配信は行わなかった。歩行の様子は前額面、矢状面の2方向からビデオ撮影を行った。

歩行終了後、収録した歩行映像を直ちにタブレット端末で再生し、自身の歩行の様子をループ再生にて視聴させた(以下、FBと表記)。

その後、自己呈示動機付け尺度(Leary et al, 1994)への回答を求めた。ここでは、「歩行映像に映っている自分自身の評価」、「自己評価を踏まえた上で、今後他者の前でどれほどそう見られるように意識して振る舞いたいか」の2つの観点についてそれぞれ回答してもらった。

最後に、別室にてデブリーフィングを行い実験終了とした。

### 3.3. 自己評価実験

「自己である」という前提の有無による自己評価への影響を確かめるために、前節の歩行収録によって得られた映像に基づいてCGアニメーションを作成し、評価実験を行った。

#### 3.3.1. 歩行アニメーションの作成

前節で撮影された映像から、人間の関節点を抽出する姿勢推定アルゴリズムであるOpenPose (Cao Z. et al, 2018) を使用して、二次元座標データを取得した。取得した二次元座標データから17か所(鼻, 首, 肩, 肘, 手首, 腰, 膝, 踵, つま先)の座標点を用いて、MATLABにてデータに欠損のない95名分の歩行アニメーションを作成した(図1)。画面の左から右へ、右から左へ向かう1往復分の歩行を2回反復した映像を評価実験に用いた。

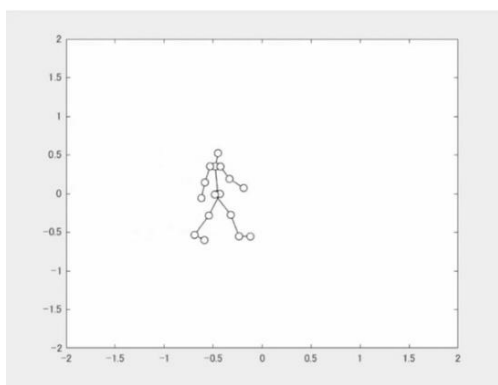


図1 歩行アニメーション

#### 3.3.2. 実験参加者

実験参加者は、大学生74名(男性35名, 女性39名,  $M = 20.93$ ,  $SD = 1.25$ ), 中高年層18名(女性,  $M = 53.00$ ,  $SD = 4.82$ )の計92名であった。

#### 3.3.3. 実験手続き

前節の歩行収録実験が終了してから約10日後に、前節の実験参加者(データに欠損のない90名)に対してオンラインにて評価実験を実施した。実験のためのプラットフォームはGoogle Formsを用いた。

まず、参加者には他者の歩行に対する評価実験として、3名分の歩行アニメーションを呈示し、呈示刺激ごとに100点満点で点数をつけてもらった。なお、参加者には「3名の他者の歩行」と教示を行ったが、実際には二人目の刺激は、参加者自身の歩行に基づくアニメーションを呈示した。また、一人目と三人目は、全参加者に共通の刺激(一人目は男性, 三人目は女性)を用いた。

## 4. 結果

### 4.1. 自己呈示欲求と方略の一致・不一致

本節では、自己呈示欲求と自己呈示方略の一致者と不一致者にはどのような差異があるのかを確かめる。

#### 4.1.1. 自己呈示の因子抽出

自己呈示調査で得たデータを用いて、自己呈示について、「自己評価」、「自己呈示欲求」、「自己呈示方略」それぞれに分類し、因子分析(最尤法, プロマックス回転)を行った。

自己評価では「劣等感」「自負心」「向上心」の3因子が抽出された(累積寄与率 65.37%) (表1)。

表1 自己評価における因子分析結果

評定項目	F1	F2	F3
自分は役に立たない人間だと思う	0.813	-0.116	-0.077
自分はだめな人間である	0.789	0.039	0.064
自分には、自慢できるところがない	0.590	-0.129	-0.027
自分は敗北者だと思う	0.444	0.059	0.112
自分は色々な良い資質をもっている	0.069	0.844	-0.030
自分は価値のある人間である	-0.023	0.808	0.183
自分は自信がある	-0.223	0.521	-0.171
自分は物事を人よりうまくやれる	-0.155	0.472	0.096
もっと自分を尊敬できるようになりたい	0.093	0.172	0.591
自分に満足している	0.060	0.409	-0.424
	F1	F2	F3
因子間相関	1	-0.700	0.143
	F2	1	-0.200
	F3	0.143	1

自己呈示欲求では、「自己卑下的欲求」、「承認欲求」、「他者評価<謙虚>欲求」の3因子が抽出された(累積寄与率 59.39%) (表2)。

表2 自己呈示欲求における因子分析結果

評定項目	F1	F2	F3
自分は役に立たない人間だと思う	0.716	-0.092	0.080
自分はだめな人間である	0.629	-0.014	-0.036
自分には、自慢できるところがない	0.624	0.074	-0.057
自分は敗北者だと思う	0.489	0.025	0.002
自分は色々な良い資質をもっている	0.002	1.031	-0.094
自分は価値のある人間である	-0.008	0.562	0.125
もっと自分を尊敬できるようになりたい	0.003	0.032	0.684
自分は自信がある	-0.129	-0.072	0.645
自分に満足している	0.118	0.001	0.513
自分は物事を人よりうまくやれる	0.029	0.307	0.420
	F1	F2	F3
因子間相関	1	-0.133	0.088
	F2	1	0.373
	F3	0.088	1

自己呈示方略では、「承認方略」、「自己卑下的方略」、「他者評価<充実>方略」の3因子が抽出された(累積寄与率 66.12%) (表3)。

表3 自己呈示方略における因子分析結果

評定項目	F1	F2	F3
自分は色々な良い資質をもっている	0.909	-0.083	0.043
自分は価値のある人間である	0.855	-0.031	-0.094
自分は物事を人よりうまくやれる	0.639	0.114	0.068
自分は役に立たない人間だと思う	-0.013	0.761	0.160
自分はだめな人間である	-0.039	0.733	0.005
自分は敗北者だと思う	0.006	0.595	-0.058
自分には、自慢できるところがない	0.055	0.559	-0.098
自分は自信がある	-0.029	-0.156	1.032
自分に満足している	0.022	0.176	0.441
もっと自分を尊敬できるようになりたい	0.318	0.108	0.333
	F1	F2	F3
因子間相関	F1	1	0.530
	F2	0.530	1
	F3	0.492	0.196
			1

3つの因子分析より、自己呈示の3つの観点では、共通して「自己は色々な良い資質をもっている」「自己は価値のある人間である」等のポジティブな側面と、「自己は役に立たない人間だと思う」「自己はだめな人間である」等のネガティブな側面があることが示された。それに加えて、他者から謙虚な人と見られたいという欲求や他者から充実している人だと見られるよう振る舞うといった、観点ごとに異なる側面が存在することも明らかとなった。

#### 4.1.2. 一致者と不一致者の相違

自身の自己呈示について、前節で得られた因子構造にしたがって、因子それぞれを構成する項目の素点の平均値を印象得点とし、一致・不一致ごとに集計した(図2)。

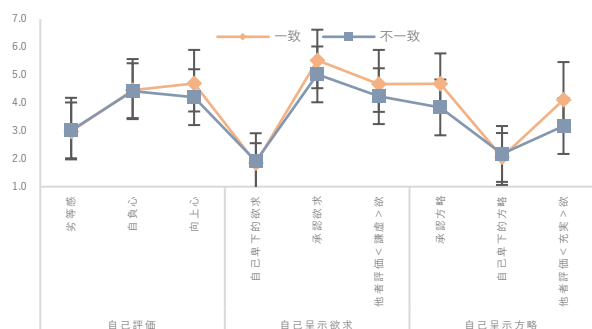


図2 一致・不一致における自己呈示得点グラフ (エラーバーは標準偏差)

一致・不一致者間に自己呈示に差異があるのか検討するため、自己呈示得点を従属変数、一致・不一致(参加者間)および自己呈示の3つの側面(自己評価・自己呈示欲求・自己呈示方略)(参加者内)を独立変数とした二要因分散分析を行った。その結果、自己呈示と一致・不一致の間に交互作用がみられた( $F(3,385) = 2.914, p = .029$ )。単純主効果検定を行った結果、自己呈示欲求の「承認欲求」および自己呈示方略の「承認方略」「他者評価<充実>方略」の一致・不一致間において5%

水準で有意差がみられた。これより、不一致者(自己呈示欲求と自己呈示方略が一致していない者)は承認されたいという欲求が低く、ポジティブな印象を与える方略をとらないことがわかった。

## 4.2. 「他者から見えている自己」のFBによる自己呈示方略への影響

本節では、「他者から見えている自己」を客観的に捉えることで、呈示者が「他者に見せたい自己」としての自己呈示方略をどのように調整するかを確かめる。

### 4.2.1. 自己呈示動機付け尺度の因子抽出

3.2の歩行収録では、自己呈示動機付け尺度(7件法)を用いて、1回目の歩行前に「どのように見られたいか」(自己呈示欲求)、「他者の前でどれほどそう見られるよう意識して振る舞っているか」(自己呈示方略①)、自身の歩行のFBの後に、「自身の歩行がどう見えたか」(自己評価)、「今後、他者の前でどれほどそう見られるよう意識して振る舞うか」(自己呈示方略②)への回答を求めた。例えば「親しみやすい」という項目であれば、歩行前に「親しみやすい人だとみられたいか(自己呈示欲求)」「親しみやすい人だとみられるように意識して振る舞っているか(自己呈示方略①)」を問い、FB後に「親しみやすい人に見えるような歩行であったか(自己評価)」「今後、親しみやすい人だとみられるように意識して振る舞うか(自己呈示方略②)」と問うた。

分析では、回答に不備があったものを除き、96名を分析対象とし、得られた測定値を元に因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った。その結果、「魅力因子」「倫理観因子」の2因子が抽出された(累積寄与率 62.85%) (表4)。

表4 自己呈示動機付け尺度因子分析結果

下位尺度名	評定尺度	因子負荷量	
		1	2
魅力因子	外見的に魅力的である	.983	-.102
	ハンサムである(かっこいい)	.877	-.113
	能力がある	.812	.040
	好感的である	.660	.215
	知的である	.631	.124
	親しみやすい	.593	.191
倫理観因子	ある程度うまくこなせる	.575	.198
	主義主張がある	.565	.164
	倫理観がある	-.086	.979
	道徳的である	-.015	.904
	社会的に望ましい人柄である	.220	.604
			1
因子間相関		1	.642
		.642	1.000

### 4.2.2. 承認欲求によるクラスター分析

実験参加者を承認欲求によってグループ分けするために、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の得点を用い

て k-means 法によるクラスター分析を行った。その結果、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求がともに低い「低欲求」群、拒否回避欲求が高い「拒否回避高」群、賞賛獲得欲求が高い「賞賛獲得高」群の3クラスターに分類された。

#### 4.2.3. FBによる自己呈示方略への影響

自身の歩行している姿をFBすることによって、自身の歩行をどのように捉え（自己評価）、またその後の自己呈示方略をどのように調整するか（自己呈示方略②）、また、それが承認欲求の特性によってどのように異なるかを確かめる。承認欲求（低欲求／拒否回避高／賞賛獲得高：参加者間）、自己呈示の4側面（自己呈示欲求／自己呈示方略①／自己評価／自己呈示方略②：参加者内）を独立変数、魅力因子、倫理観因子をそれぞれ従属変数とした二要因分散分析を行った。

その結果、両因子共に、交互作用が認められた。魅力因子（図3）は、いずれに欲求群においても、自己呈示欲求よりも自己呈示方略の得点が低くなること、また、自分自身の歩行に対する評価が低くなることわかった。また、拒否回避欲求高群、賞賛獲得欲求高群は、今後の方略がFB前の自己呈示欲求の得点に近づき、低欲求群は、FB前の自己呈示欲求の得点よりも今後の方略のほうが高くなることわかった。また、倫理観因子（図4）も魅力因子とほぼ同様の結果となった。

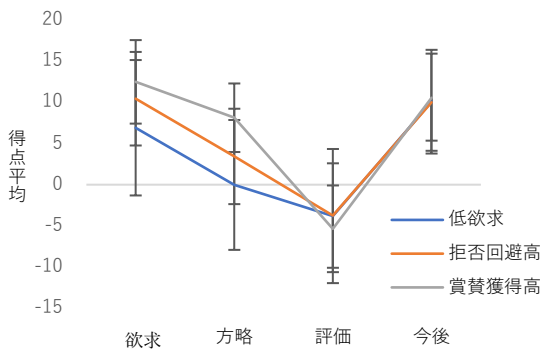


図3 魅力因子における各水準の平均値  
(エラーバーは標準偏差)

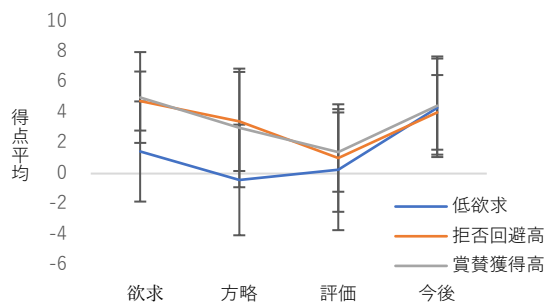


図4 倫理観因子における各水準の平均値

(エラーバーは標準偏差)

#### 4.3. 「自己である」という前提の有無における自己評価への影響

本節では、「自己である」という前提の有無によって自己評価に影響はあるか、またそれが性別で異なるかを確かめる。

「自己である」という前提の有無による自己評価への影響を確かめるために、他者か自己か（CGアニメーションを他者と捉えたとき／自己と捉えたとき：参加者内）および性別（男性／女性：参加者間）を独立変数、歩行に対する評価得点（100点満点）を従属変数とした二要因分散分析を行った（図5）。

他者か自己かと性別の交互作用が認められた ( $F(1, 88) = 5.036, p = .027$ )。単純主効果検定の結果、男性は「自己である」という前提の有無で自己評価に変化はないが、女性は「自己である」とわかった時の自己評価が他者である前提で評価した時に比べて低くなることわかった。また、他者である前提の際の評価に性差はなかったが、「自己である」前提での評価は、男性よりも女性の方が低いことわかった。

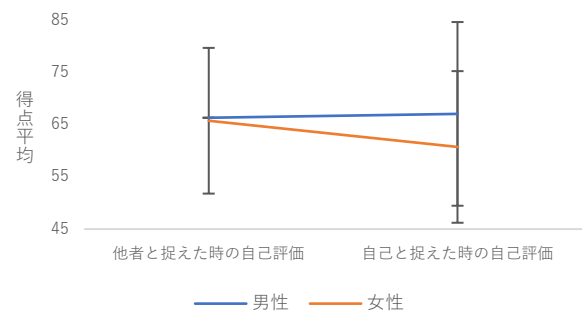


図5 「自己である」という前提の有無と性別の違いによる自己評価  
(エラーバーは標準偏差)

### 5. 考察

#### 5.1. 不一致行動を選択する要因

自己呈示の欲求と方略が一致している者としていない者の差異として、一致している者はしていない者よりも承認欲求が高いことがわかった。

一方、自己呈示方略についてみると、「承認方略」「他者評価<充実>方略」というポジティブな方略では、不一致者は、他者から認められたいという欲求は持っているが、ポジティブに見られるような行動は表出しないことが示された。不一致者のこのよ

うな自己呈示の要因の1つとして、自己をポジティブに表現しないという方略をとることで、逆に承認欲求を満たしている可能性が考えられる。吉田・浦・黒川（2004）によると、自己卑下的呈示をする者は「自己卑下的な振舞いに対して他者は好意的な反応を返す傾向がある」というスクリプトを形成しているとされる。また、自己卑下的呈示を行う理由として、親しみを感じてもらふことによる関係維持や否定してもらふことによる自己肯定があるとしている。さらに、自己卑下的呈示に対する否定的反応が返されたと認識するほど自己を肯定的にみるという可能性も示している（吉田ら、2004）。これらを踏まえると、自己卑下的な自己呈示を行い、他者から「そうではない」と否定されることで、逆に承認欲求のようなポジティブな欲求を満たそうしている可能性が示唆される。したがって、欲求と方略を一致させない理由は、他者との関係維持だけでなく、他者から「ネガティブな部分を否定されることによる承認」を得るためだと考えられる。

## 5.2. 自己の姿をFBすることによる影響

本研究では、承認欲求の高低に関わらず、全体として自己呈示欲求よりも自己呈示方略のほうが低くなり、自分自身の（歩行に対する）評価はさらに低くなることがわかった。また、拒否回避欲求高群、賞賛獲得欲求高群の自己呈示欲求はどちらも高い値を得ており、自己の歩行を視認することにより、今後の方略が、元々内的に抱いていた欲求（「見せたい自己」）に近づくことがわかった。他方、低欲求群は、承認欲求高群（拒否回避欲求高群、賞賛獲得欲求高群）よりも自己呈示欲求が低く、自己の歩行を視認することで、今後の方略が元々内的に抱いていた欲求よりも高くなることがわかった。

本研究において、拒否回避欲求が高い人、賞賛獲得欲求が高い人は、自分自身の振る舞いに対する自己評価に関して、自己評価のほうが高くなるという傾向は見られなかった。そのため、拒否回避欲求が高い人と、賞賛獲得欲求が高い人は普段の自己呈示方略において、行動表出場面における「見せたい自己」を表出できているとポジティブに捉えることができていたのではないかと示唆される。また、小島（2011）において、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の2つの欲求がともに強い人ほど、将来の出来事に対して防衛的悲観性（「過去の似たような状況において良いパフォーマンスをおさめているとポジティブに認知しているにも関わらず、将来の出来事については低い期待を有する認知的方略」（小島、2011）が強く表れることが明らかになっている。このことから、「見せたい自己」を強く持つ拒否回避欲求が高い人、

賞賛獲得欲求が高い人は、防衛的悲観性が働いたことで、自己呈示方略では「見せたい自己」を表出できていないということが理解できる。しかし、本研究では自己評価によりその後の自己呈示方略が「見せたい自己」に近づくということがわかった。これは、防衛的悲観性により自己呈示方略として「見せたい自己」を表出できていない中で、自己評価では望んでいない自分自身の振る舞いや評価の低い自分自身の振る舞いを理解することで、防衛的悲観性が破綻したことが要因であると示唆される。

一方で、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求がともに低い人は、今後の方略では「見せたい自己」よりも理想の高い自己を表出しようと思うようになることがわかった。小島（2011）において、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の2つの欲求がともに低い人は、他者からの評価ではなく自分自身の基準でのみ物事をとらえやすいということが明らかになっている。そのため、自己評価により低い得点をつけることで自分自身の振る舞いを見直し、今後の方略では「見せたい自己」よりも理想の高い自己を表出しようと思うようになるのではないかと示唆される。

## 5.3. 「自己である」前提の有無と自己評価

「自己である」という前提の有無の影響は男女で異なることがわかった。女性にとって、「自己である」という感覚や意識は自己評価を低下させる要因であると考えられる。女性は男性よりも自己嫌悪感を感じる傾向があり（佐藤、1999）、他者と比較した時に女性は男性よりも劣等感を感じやすい（広田、2006）とされていることから、物理的には同一の映像（歩行）を見ているにも関わらず、「自己である」という前提の付与が評価を低下させたと考えられる。また、男性よりも女性の方が外見的魅力をもとに自己評価をしやすい（安保・須賀・根建、2012）ため、自己の歩行であるとわかった時の自己評価に性差が現れたと考える。ただし、これらは、文化によって暗黙裡に再生産されてきたジェンダーバイアスに、今なお自己評価が影響されてしまっていることを示唆するものでもあり、ジェンダー論の視点からさらなる丁寧な考察が必要と考える。

## 6. おわりに

本研究は、歩行という基礎動作を題材として、自己呈示としての「他者に見せたい自己」を、欲求、方略の側面から捉え、それが様々な文脈の中で変容していく様子を実験的に確かめた。本研究によって、他でもない唯一無二の身体が、「自己」という主観的な存在でもあることにより、極めて流動的に変容す



ることが可視化されたといえる。この点は、今後アバタやロボットといったエージェントの身体性を考える上で極めて重要な視点である。つまり、エージェントが「自己」の分身、あるいは自身の身体の延長であるとするならば、物理的には「同一」の身体性（外見）を有していたとしても、ユーザの特性や文脈によってその捉え方が大きく流動することを意味するからである。本研究は、自己呈示と歩行という極めて単純な動作を基盤とした基礎研究であるが、今後はアバタやロボット等のエージェントへの自己の投射と自己呈示の関係性について検討することが必要と考える。

## 参考文献

- [1] 安保恵理子・須賀千奈・根建金男 (2012), 『外見スキーマを測定する尺度の開発および外見スキーマとボディチェック認知の関連性の検討』, パーソナリティ研究 20, pp. 155-166
- [2] 広田千織 (2006), 『自己評価の高低および安定性と劣等感の関連』, 日本パーソナリティ心理学会発表文集 15, pp. 80-81
- [3] 小島弥生 (2011), 『防衛的悲観性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連:2つの承認欲求がともに強い人の特徴について』, 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇 (11), pp. 67-74
- [4] 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003), 『賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み』, 性格心理学研究 11, pp. 86-98
- [5] Leary, M. R., Nezlek, J. B., Downs, D. L., Radford-Davenport, J., Martin, J., & McMullen, A. 1994 Self-presentation in everyday interactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, pp. 664-673
- [6] 松本芳之 (2002), 『役割期待が自己呈示行動に及ぼす影響: 性役割期待と成功回避 (1)』, 早稲田大学大学院文学研究科紀要 48, pp. 39-52
- [7] Rosenberg, M. (1965), *Society and the adolescent self-image*. Princeton: Princeton University Press.
- [8] 斎藤勇 (2006), 『日本人の自己呈示の社会心理学的研究-ホンネとタテマエの実証的研究』, 誠信書房
- [9] 佐藤有耕 (1999), 『青年期における自己嫌悪感の感情状態の発達的变化』, 青年心理学研究 11, pp. 1-18
- [10] 吉田綾乃・浦光博・黒川正流 (2004), 『日本人の自己卑下呈示に関する研究: 他者反応に注目して』, 社会心理学研究 20, pp. 144-151
- [11] Z. Cao, G. Hidalgo, T. Simon, S. Wei, Y. Sheikh, (2018) "Realtime Multi-Person 2D Pose Estimation using Part Affinity Fields", arXiv preprint arXiv:1812.08008.